

---

# 禁断の恋 トライアングル （番外編）

黎奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

禁断の恋 トライアングル （番外編）

### 【Nコード】

N3450N

### 【作者名】

黎奈

### 【あらすじ】

本編 禁断の恋 トライアングル の番外編です。  
本編を先にお読みになられたほうがいいと思います。

## 第一章 新婚旅行の知らせ（前書き）

本編 禁断の恋 トライアングル の番外編です。  
本編を先に読まれたほうがより楽しくお読みになられると思います。

## 第一章 新婚旅行の知らせ

今日もユウナは部屋でのんびりと過ごしている。

私の誕生日から一年以上過ぎていた。

それからというものの、王は病でお亡くなりになり誰が即位するという話で城中大騒ぎ。

ゼロは私を相手してられるほど暇ではなくなってしまった。

だが、ある日突然ゼロが私に言ってきた。

「俺が即位することになった。即位したら身動きが取れない。しばらくはユウナとも会えなくなるだろう。」

と。

そう、やはり、ゼロが王になるんだね。

私は驚かなかった。

驚くも何も私はいたって冷静なほうだし何より、ゼロの兄が王になることを望んでいない。

だったら次男であるゼロに王の座が回るのは当たり前だ。

驚くような話ではない。

「そうなの。それで？」

私はゼロがそれだけの理由で来たわけではないと思った。  
明らかにゼロの表情で分かる。

「ユウナ、他に言うことは無いのか？」

「何が？」

ゼロは少し悲しそうに言う。  
私は聞き返す。

「・・・まあいい。それより、だ。俺ら、まだ新婚旅行してないだ  
ろ？」

「そうね。」

「その新婚旅行を忙しくなる前に行きたいのだが、いいか？」

「ゼロが行きたいなら・・・いいよ。」

「じゃあ、行くか。で、場所なんだが・・・海にした。」

「は？」

もう決めてあるの？

その速さに驚くと共にもう一つ驚いたことがあった。

「だから、海さ。」

「え？それは、魔法を使える空間から外れているんじゃないの？？」

海、それは三つの国を囲う空間から外れている場所。  
だから、海では魔法を一切使えない。

「それがどうした？」

ゼロは関係ないという風な顔で言う。

仮にでも私たち王族だよ？？

そんな人たちが海！？

いいのか、本当にッ

それに、私……

「仮にも私たち王族だし……海なんて……」

「関係ないさ、王族なんて。な、海、行こうぜ？」

私の戸惑いにゼロは気づかない。

私は王族なんかより自分の身を案じているのだ。

私は泳げないし、水は嫌い……怖い

「行きたくない……」

私は呟いた。

「え？」

ゼロは一体何を言ってるんだという風な眼で見つめてくる。

私はうつむいて

「行きたくない・・・」

と、ゼロに聞こえるように言う。

「なぜ、だ？」

私の異変にゼロが戸惑い理由を聞いてくる。

「私、泳げないもの。」

理由を言う。

「泳げない？ だったら、俺が教えてやるから、な？ いこうぜ、海。」

ゼロは私への説得を諦めない。

どうしよう。

ゼロに本当のこと言おうか？

それとも黙っておくべき？

いや、ほかに手段はある。

ロイを・・・呼ぼう。

ロイがいれば、何とかなるかもしれない。

そうよ、ゼロに教えずとも事情を知ってるロイなら・・・

「・・・分かった。でも、本当に泳げないから。」

「大丈夫さ。俺がいる。」

私の言葉にゼロは優しく言う。

「いつなの？新婚旅行。」

「一週間後に予定している。およそ三泊四日の予定だ。」

「そう。分かったわ。ゼロはまだ忙しいのでしょうか？」

「ああ。またくるからな。」

そう言って出ていった。

ゼロの気配が遠くなるのを感じた後、私はロイに手紙を書いた。

ロイへ

急でごめんなさい。

私、ゼロと進行旅行へ今から一週間後に三泊四日で海に行くらしいの。

ほんとは行きたくないけど、ゼロの頼みは断れないし。

ロイが忙しいのは分かってるけど来てもらえないかしら。偶然ってことにしてもらえないかな？

私が呼んだとばれたら、後で責められちゃう。

いい返事待っているね。

ユウナより



これを封筒に入れて伝書鳩で送る。

本当にいい返事を期待していた。

水は私にとって、脅威の存在にしかないのだから。

## 第一章 新婚旅行の知らせ（後書き）

番外編を書くことにいたしました。

他の連載小説と平行に進めていきたいと思いますので

投稿は遅いと思いますがそこは理解してくださいと幸いです。

他の連載が多くてごめんなさい。

思い付きばかりで書き出した小説ばかりですから・・・ほんとにごめんなさい。

## 第二章 新婚先は海に決定。

私がロイに伝書鳩を送った後すぐに返事が来た。

ユウナへ

もちろん行くよ。

ユウナの頼みを聞かなかったことなんて一度もないよ。  
じゃあ、海で会おうね。

ロイより

ロイが来てくれることにとても私はほっとした。

そして、今日、もう新婚旅行は始まるうとしていた。

嫌なことが先にあるとすぐに来てしまうことを改めて思い知らされた気がする。

憂鬱なまま馬車に乗って海がある場所まで行く。

宿は 海で経営しているホテルで泊まることになったらしい。

馬車に乗っている間、ゼロはやけにうれしそうだった。

そのことを、

「ゼロ・・・やけにうれしそうだね。そんなにうれしいの?」

と、単刀直入に聞く。

すると、いきなりゼロが私の体を自分に引き寄せキスしてきた。

唇が重なる。

「んっ！……い、いきなりっ何するのッ!？」

唇を開放されると、私は思わず声を荒げる。

「お前はうれしくないのか？俺との新婚旅行。」

ゼロは私の動揺を 私が旅行を嫌がっている と、勘違いしている  
せいか

悲しそうな表情で聞いてくる。

うつ、そんな顔されると私どういえばいいか迷うんだけど……  
はつきり行っちゃおうか、海は嫌だと。

でもなあ。それはちよっといまさらって感じもするし……。

「べ、別にうれしくないわけじゃないよ。ただ、そんなに表情に出  
てるからつい……。」

結局、他の言い訳を言った。

「俺、そんなに顔に出るのか??」

ゼロは マジか？ と真顔で聞いてくる。

ゼロ……自覚なさすぎ……

心でそう呟く私。

「うん。分かるぐらいすぐ。」

だから、この際はつきり言っただった。

「そうか。それなら少し抑えないとな。」

と、ゼロは納得したように言う。

抑えられるの??本当に??

内心すごく不安になった。

「まあ、頑張つて、時期国王様?」

無理だよ。絶対言葉だけ。

心の中では否定する。

「そうだな。王としての自覚を持たないとな。」

ゼロは自分でうんうん頷いていた。

そうこうしているうちに海に着いた。

先にホテルに向かって、手続きを済ませる。

部屋の番号は 58番室。

なぜか、部屋はゼロと同じ一室。

「別じゃないんだ・・・」

思わず諦めたように呟く。

内心そうじゃないかと予想がついた。

昔と打って変わったもの・・・ゼロの積極さが・・・。  
私、なんかコワイよ、その辺が。襲われそうで。

ああ、なんか震えてきた。

「じゃあ行くぞ。早速部屋に行ったら、財布と必要なもん持って海に行くからな。」

ゼロが平然と、でもうれしそうに言う。

「ええ。分かったわ。」

そう言って私はゼロについていく。

その後、着替えで恐れていたことが起こった。  
きつと、

「なんで来るのッ!？」

「え・・・一緒に着替えようと・・・」

「なんでっ!？」

「いや・・・だつて・・・」

「だつて・・・なんてだめっ!!早くそつちで着替えてよっ!!」

「え・・・せつかく同じ一室なんだから・・・」

「そんな理由で覗かないでっ!!」

「覗くつて・・・俺そんなことじゃ・・・ただ一緒に・・・」

「嫌っ!!海なら一緒にしょお??だから覗かないでっ!!来ないでっ!!」

「そんなに嫌がらなくても・・・わ・・・悪かった・・・」

と言う声が・・・部屋の外で聞こえただろう。

まあゼロの声は聞こえてなかったとしても私の声は完全に漏れていたら私は思う。

着替えの後私はずから少し離れたところにいた。

「俺が悪かった。もうしないから俺から避けるのはやめてくれ・・・」

ゼロのそんな悲痛な声に私はやっとのことで警戒心を解いた。

だが、まだ完全には警戒心を解いてはいない。

解けるわけないんだ。

だって、下着だけの状態を見られたとはいえゼロが理性失いかけて抱きついてきたのだから。

そんなもの許せるわけがない。

許した人がいたらお願い・・・私に会わせて。

そのときに あんたにプライドはないのかっ！！ って怒鳴りつけてやる。

その後いろいろ語って・・・それからそれから・・・

数え切れないからこれで終わるけど、

私は覗かれるまでゼロがこんな奴だと思わなかったのだった。

それからなんとか海まで行った。

海にはたくさん人がいて

露店が並んでいるほうはおそらく身動きがなかなか取れないほどの混み具合だった。

海岸はまだマシなほうだった。

ロイはまだかときよろきよろ見渡したがなかなか見つけれない。

ゼロは風にそよがれて気持ちよさそうな穏やかな顔だったが、それ



が急に険しくなった。

「どうしたの？」

思わず聞いてしまう。

「場所移動するぞ。」

ゼロはそれだけ言って私の腕をつかむ。

「え・・・ちよつとっ！いや・・・触らないでっゼロってばっ」

さっきの恐怖でまだ体がゼロを拒否する。

「そんなに拒絶するなっ。もっと抵抗をなくせッ」

ゼロは焦る。

私はゼロが急いでいる理由が分かった。

それは・・・ロイっ！！

「ロ、ロイがあそこにいるよっ。なんで逃げようとするのっ！ロイっ！ロオーイイー！」

何とか私は遠くにいるロイに見つけてもらおうと叫ぶ。

「ロオーーーんっ・・・むぐっぐぐぐっ！！」

ロイの名を叫ぼうとしたがゼロが私の口を大きな手でふさいでしま

う。

「むっ<sup>はっ</sup>!!むぐぐぐっ<sup>はなしてっ</sup>!!」

必死に抵抗する。

「こらっ。見つかるだろうがッ!呼ぶなッあいつをつ!」

ゼロは私に言い聞かせるように言う。

だが、ゼロの行為は余計にロイを気づかせてしまった。

「あっ、偶然だね、  
ユウナっ会いたかった。・・・ところでゼロ君、君はユウナに一体  
なにをしようと?。」

ロイは早々に私とゼロのいる場に来て言った。

私には穏やかな口調のロイがゼロに対して静かにでも迫力のアル怖  
い口調で聞いた。

ロイっ!!来てくれたんだ。助かった。

「もう一回言うよ?どうしてゼロ君がユウナに対してこんなことを  
しているのかなあ?。」

ゼロはロイの迫力に吞まれうっとな黙る。

「いい加減、放してあげて?。」

私をつかむゼロの腕をロイがつかむ。  
そしてゼロから私を引き離す。

「ロイツ。ありがとう。ロイの姿を見て、  
ロイを呼ぼうとしたらゼロが急につかんできて・・・ほんとに助かったの。ありがとう。」

私はそう言ってロイのほうへ身を寄せる。

「！ユウナ、ロイの方へ寄るな。こっちに来い。」

ゼロは怒りで震える声を抑え、私に腕を伸ばす。  
ゼロの腕が私に届きそうになり、

「いやっ。」

思わず声を上げると

ゼロの腕はロイによって私に触れることを<sup>まぬが</sup>免れた。

「ユウナがこんなにも怯えてる。君はそんなに乱暴に扱ったのかい??  
それとも・・・まさかとは思うけどユウナの着替えを覗いたりとかそういうことをしたのかい??」

ロイはゼロの腕をつかみながら言う。

す、鋭いつ。

私は 覗き と言う言葉に大いに反応を示した。

ゼロも顔をこわばらせて引きつった表情になる。

「まさかつ本当にしたのかいっ！？ねえ、ユウナ、本当に？」

ロイの まさかね という表情で私に聞く。

ゼロは私のほうに視線を送り 言うな と伝えていることを悟った。

ゼロが悪いんだからね？

そう思っただけかしながらもこくと頷く。

そのときのゼロの顔はすごく青ざめていた。

ロイは これで責めることができる と言うような笑みを見せ、その後、真剣な顔つきになりゼロを一気に責め立てる。

「ゼロオオおおお 君という奴はああああ」ユウナをなんていう目にあわせるんだっ。

だいたいユウナは繊細で傷つきやすく壊れやすく周りには ガラスのバラ と呼ばれているほどなんだよお？？それなのに、君というやつはああああ」もっとユウナをね、大事に大事にそれはもうすぐすごく大事にしてあげなきゃいけないんだよ？？第一君はもっとユウナに――――」

ロイのゼロに対する私のための説教はすごかった。

長くて長くて、それはもう私をほめるような感じでゼロに責めて攻めてせめまくっていたの。（責める・攻める の二つの言葉を用いたのは両方の意味をロイの言葉には含んでいたから。）

この説教、いつまで続くの？

私が頷いたのがいけなかったのかな？

でもいいよね、ゼロがいけないんだし。

それに、ロイにせめられているゼロはなんだかものすごく見ていて楽しいわ。

いまも・・・

「いや、だって、俺とユウナは夫婦だし、・・・べつにいいかと・・・」

「夫婦？？夫婦だからってユウナが嫌だと言うものをなぜやろうとするんだっ。君はもつとこうユウナをねー」

とか、

「なんで・・・俺はそんなにお前なんかに言われなければ・・・」

「なんでもですっ。ユウナを大事に思ってるのは僕も同じなんです。ほんとに君には渡したくないですっ。でも君がそんな奴なら僕も考えないといけませんね。  
こんな君には・・・」

「わかった、もうしない。」

「ほんとに？いや、信じられないし、もう遅いですよ。大体君にはユウナの存在の大きさが分かってないです。ユウナはこの世にいてはならないんです。そ「rウエをあなたは汚すような真似を・・そんなこと許されないのでからね、もっとユウナをそれはもう宝のように大事にしなければ――」

とか。

ゼロが以外にも弱気なところが見ていて面白い。

でもいい加減長いんじゃないかなあっておもっ。

私は太陽の位置を見てそう思っのだった。



## 第二章 新婚先は海に決定。(後書き)

ゼロがロイにせめ立てられるシーンが多くなってしまいました。  
でも、こんなゼロもいいでしょう？

逆にこんなロイもありでしょう？

好みは読んで下さっている皆さんの好み次第ですが・・・。

ぜひ、それを聞かせてくださるとうれしいですね。



### 第三章 海は危険

ロイがゼロの説教を終わらせたのはちょうどお昼過ぎぐらいだった。終わらせたというよりも私が止めたんだだけだね。

そのときロイが私にいろいろ言ってくるかなと思ったんだけど

「ゼロに警戒心を解かないようにするんだよ？もうしないとは思っけど、念のため、ね？」

と、軽く言うだけで済まされた。

「うん。ありがとう、ロイ。」

私はゼロに言ってくれたことに感謝してお礼を述べる。

「じゃあ泳ぐか。」

「え・・・」

ゼロが言い出す。

私は戸惑う。

「大丈夫。僕がいるから海を警戒しないで、ね？」

「うん、うん。」

ロイの言葉に少し気を緩めた私。

海を警戒しちゃだめ。

警戒しただけでも私は・・・

「じゃあ行こう。」

ロイは私の手を引いて海にゆっくり入っていく。

「なんであいつが・・・ユウナは俺のものなのに・・・」

私とロイの背後でぶつぶつ呟くゼロ。

やりすぎだった？

ゼロがすねちゃった。

でもね、ゼロが悪いんだから反省してよっ。

心の中で言う私。

海水が腰の辺りまで来たときビクツと体が震えた。

「大丈夫。怖がっちゃだめだよ。僕がいるんだから大丈夫。」

ロイはそう言って私を安心させようとしてくれた。

「う、うん。」

私は頷く。

だが、体は正直なもので少しまだ震えていた。

海水が胸まで浸ると

「僕が背中を浮かせるから海に浮いてみようか。  
海に体をなじませれば、海は何もしてこないから。」

「うん。」

ロイの声に私は頷く。

「心の準備はいい？」

「うん」

私は頷き、ロイが私の背中に触れたときぎゅっと目を閉じた。  
体が浮き上がり、長い自分の髪までもが浮く。

私は目を開けた。

「どう？海と一体になれた？」

ロイは聞く。

「うん。」

私は微笑む。

さっきまで怖くて体に触れる水にすごく違和感を感じたのに今はまるでない。

これもロイのおかげ。

そついおうとしたとき、急に背中に会ったロイの支えが消えた。

「!」

私の体は一気に沈んだ。

く、苦しいッ

息ができないと感じたとき、海と一体したときの感覚はすでになく、まるで敵に囲まれている感覚に襲われた。

だが、それは一瞬のことだった。

体はすぐに誰かの手によって起き上がり、さっきまで沈んでいた顔がすぐに海面へと出る。

そして、誰かに抱かれる。

「ユウナっ！大丈夫っ！？怖くなかった？平気だった？？」

ゼロっ！！お前が急に手をつかむからこんなことになったんだっ！

「！」

声からして私の体はロイに抱かれていたと分かる。

ぼんやりとした視界にはロイとゼロの二人の姿が映る。

ロイはゼロに激怒していた。

「悪かった。ユウナっ！悪い。大丈夫だったか？」

ゼロは私に謝る。

私が答える前に、ロイが答える。

「大丈夫なわけじゃないかつ！！今、ユウナはおぼれかけたんだぞっ！？

ユウナは泳げないんだっ。それを知っててなんで僕の手をつかんだ！？」

ロイの問いかけにゼロが答えるより早く私は

「・・・私は・・・大丈夫だから・・・ロイ・・・ゼロを責めないで・・・ゼロは・・・ただ・ヤキモチ妬いたの・・・でしょう・・・？」

と、途切れ途切れに言う。

「うつっ！・・・」

ゼロは図星らしく反論できない。

「もう・・・大丈夫だから・・・」

私はなんとか二人に微笑む。

「ユウナ・・・」

「・・・ほんとに悪かった。」

ロイは私を心配そうに見つめ、

ゼロは本当にすまないという後悔と自分を責めているような表情で言う。

「ユウナ・・とりあえず、海岸に戻ろう。まだ、昼食とってないから、休憩がてらそうしよう。」

ロイがそういつて私の手を引いて海岸まで戻る。

ゼロはこぶしをぎゅっと握り締めてそのまま歩き出す。

海岸にたどり着き、近くのいすに座ると

「ゼロのせいだったんだからゼロのおごりで何か買うのが筋ってもんだよね??」

「うつ・・」

ロイが早々にゼロを責め、ゼロはうなった。

「ロイ・・それはあまりにも・・」

私は反論しようとしたが

「ユウナ、君はあの時、ゼロのせいでおぼれそうになったんだよ？怖い目にあっただんだよ？」

僕はあそこでユウナを失うことになったらと思うと・・僕は嫌だよ。

「

だからその責任とってもらおうね？ と付け足して私の反論は聞いてもくれなかった。

このときのロイは私には笑ってくれたけど目は本気だったし、ゼロを見る視線はとても冷たかった。

「じゃあ、買ってきてね」

「ああ。」

ロイの冷徹な笑みにゼロは反論することなく一言言うだけで買いに行ってしまった。

しばらくしても、ゼロは戻ってこない。

よほど込み入っているのだろう。

遅いなあとと思って辺りを見回していると

誰かがものすごい速さで私じゃなくロイに向かってくるのが見えた。

「やばい・・・みつかった・・・」

それにロイも気づくとロイの顔が青ざめていた。

ロイに向かってきたのはロイも勝てないロイの侍従だった。

「見つめましたよ、王子いゝ」。

逃げやしの早い方なんですから、侍従の立場を考えてください。

ああ、これはこれはユウナ様。お久しぶりです。

わたくし、ロイ王子の侍従をさせてもらっています。

では、まだ、ロイ王子にたんまりと国務がありますゆえ、引き取らせてもらいます。」

「はあ。」

ロイの侍従は私に視線を向け挨拶を簡単に済まし、ロイを引きずっていく。

「ま、待ってくれ、まだユウナと話がつーーーーー」

ロイの言葉に耳を傾けずそのまま去っていった。

引きずられるロイを見てロイがかわいそうに思えてきた。

同情するよ・・・ロイ。

そう思いながらも見送ることしか私にはできなかった。

しばらくしてもゼロは来ない。

ほんと、遅いなあ。

だいじょうぶかなあ？

行き違いは避けたいため、さっきから私はいすから動いていない。

するとゼロではない背丈の高い男性の四人組が私に近づいてきた。

「お嬢さん、こんなとこにいるんなら俺たちと遊ばない？」

その中の一人のピアスをしている男性が私に言う。

なんか・・・チャラついてる。



心の中で一言述べる。

「人を待つてるの。だからいけない。」

私はいけない理由を簡単に述べる。

「いいじゃん、別に待っていなくても。だったらそれまで海で泳ごうぜ?」

ピアスをつけた男性が私に手を伸ばしてきた。

「いやっ。触らないでっ。」

私はその手を払いのける。

「お、威勢が良いじゃん。だったら、これならどうだ?」

ピアスをつけた男性がほか三人に何かしらの合図を送る。

その瞬間、私は三人に腕をつかまれ、抵抗できなくなった。

「は、放してっ!」

何とか必死に抵抗するが男性三人に捕まれたんじゃそれも無意味。

「そのまま、海に連れて行け。おぼれさせれば、おとなしくなるだろう。」

海ッ!?!それだけは嫌っ!!

私は必死に抵抗するが無理やり立たされ、海に連れて行かれる。

「や、やめてっ！！放してっ！！」

声に出すがそれもむなしく過ぎ去る。

私の胸あたりまで海水が浸った。

海岸からは少し遠い。

いやっ・・・海・・・怖いッ・・・やめて・・・水は・・・怖い。私の・・・敵  
っ！！

ロイたちと入ったときの安堵感はなく、私の体は海水に何もかも奪  
われていくようだった。  
恐怖心もこみ上げてくる。

「やれ。」

ピアスをつけた男性が他三人に合図を出す。

「はなっーぶくぶくう・・・」

私は頭を抑えられ海に沈められた。

く、くるしいい”いつ”いきがあ”

息苦しくてどうしようもなくなる。

足から頭すっぽりと海水に浸り、恐怖心が冷静さを失わせ、私はパニックだった。

「いやあ・・・怖い、敵敵てきてきい」――い――い――

私の意志はまるで海水を伝わり海全体に何かを起こさせた。

ザッブーン！！

私を沈める男性たちは

「お、おいっやばい波が来た！？逃げるぞっ！！」

私をおいて逃げようとする。

私と男性たちはそのまま波に飲み込まれた。

体が海水に自由を奪われ、息苦しくて恐怖心が心を病にかけた。

水っ怖いっ！！敵ッ！！いやあ”いやっあ””やだっ”怖いっ””

心の叫びはまるで海の意味に伝わったかのように

『そ”な”た”は”あ”””海の”敵い”””』

海は私を蝕んでいくように深いところへ押しやっていく。

首は意思のある水によって縛られたように息苦しさが増した。

水の流れが深い深い海の谷に落とそうとしているかのような・・・

私は海に呪われている。

呪いが私の心と共鳴しあつて私を呪う。

い・・・き・・・があ”・・・もう・・・むりだあ・・・

おぼれていく中、

私は水面に誰かが潜りこんできたのをぼやけた視界に映ったのを最後に私は気を失った。

#### 第四章　ロゲンカ？　1

ユウナを助けに海にもぐりこんだのはロイだった。

なんとか侍従から逃げ出しユウナの元へと走って  
海岸のほうにたどり着いたら海は大きな波を作っていた。

その波がユウナに絡んできた男ともどもユウナを飲み込む瞬間を目  
で捉えていたからだった。

ロイはいち早く海に飛び込みユウナの姿を探す。

みつけたっ！！

ロイはユウナの姿を見つけた。

ユウナめがけて必死に泳ぐ。

ユウナっ！待っててッ！！いまいくからっ！！

ユウナに腕を伸ばしユウナをつかむ。

そして海面に向かって一心不乱に泳ぐ。

海面に顔が出るといち早く立ち上がり、ユウナを抱えて海から出る。

そして海辺にとりあえずユウナを横たわらせた。

そしてロイはユウナの胸に耳を当て心臓の鼓動を聞く。

とくん・・・とくん・・・とくん・・・

ロイはひとまず安心した。

そして次は呼吸を調べるためユウナの口元に手をかざす。

が、何も吐く息すら感じない。

「ユウナっ!!?」

ゼロがこのとき、ロイとユウナの目の前に現れた。

「何があっただんだ!？」

ゼロの問いにロイは答えず

「息を・・・していない・・・」

と、海辺の砂を握りながら悔しそうに言う。

「ユウナっ。もどってきてくれっ!!--」

ロイはそう嘆き、ユウナを抱き上げ、大きく息を吸ってキスした。

#### 人工呼吸

今まさにロイがしているのがそうだった。

ゼロは呆然と見ていることしかできなかった。

今の状況に頭がついていけないんだ。

ロイは何度もユウナと唇を合わせてしている。

その数が増えるたびにロイは焦り悔しそうに顔を歪ませる。

「ユウナア”！！・・・」

ロイの悲痛な叫びにゼロははっとしてユウナをロイから取り上げた。

「！？」

「俺が・・・やってみる。・・・ユウナっ！戻ってこいっ！！」

ゼロがユウナにロイと同じように人工呼吸をした。

ユウナだけは・・・ユウナだけは失いたくない！！  
失いたくないんだッ！！

ゼロは何度もしてそして一筋の涙がゼロの頬をつたう。

ゼロがユウナから唇を放すと

「・・・ゲホッ」

ユウナは水を口から吐き出した。

このときのゼロとロイの顔は悲しく歪んだ顔から喜びに満ちた顔へと変わった。

ユウナはのときうつすらと目を開けたがそれは一瞬のことですぐに意識を失った。

「ゼロっ！まだ油断できない。早くッ早く部屋へ連れて行くんだッ！！」

ロイは昔のことを思い出しゼロをせかす。

そしてゼロとロイはユウナを部屋へと運んだ。

部屋へ運ばれたユウナはその晩から発熱しうなされていた。

このとき、ゼロとロイのほかにロイの侍従もいた。

言い合いなんてしている場合ではないはずだが、  
ロイとロイの侍従は口げんかに似た言い合いが始まった。（ゼロ視点）

「おいつ侍従！！何度言ったら分かる！？

ユウナがこんな状態なのになんで国務があるから帰れなんて言えるんだ！？

お前はユウナより国務を選べと言っのかッ！？」

（ロイ・・・いつにもまして激怒してる・・・無理もないか・・・ユウナだもんな。）

「そうですっ！！国務を選んでくださいっ！

お立場をお考えになってください！！あなたは王子ですよっ！？」



侍従がとんでもないことを言う。

（侍従・・・あんたは人の命より国務をとるのか！？）

「王子が何だ！！僕は王子である前に一人の人間だっ！！  
お前はあのままユウナを見捨てると言いたいのか！？」

負けじとロイが言い返す。

（不本意だがそこはロイと同感だな。もっと言ってやれ！）

「そうですっ！！そうに決まっています！！人の犠牲なくしては政治  
など勤まりません！！」

開き直り気味の侍従。

（おいっ。侍従！！お前は命を何だと思ってる！？）

「犠牲だとお！？人一人救えなくて何が王子だっ！！  
お前は国務があるからと愛しい者を置き去りに・・・見捨てること  
ができるのかッ！？」

逆上するロイ。

「それはっ・・・！！」

ぐっつと押し黙る侍従。

（よく、言った！ロイ！！）

「・・・私、そんなのいけませんから分かりません・・・ですがお立場を良く考えてください!!」

侍従が立場を持ち出して言う。

（ほんとにいないのか・・・？侍従・・・それはなんかさびしい気がするぞ。）

「・・・わかった。立場はわきまえる。だが、僕は王子である前に一人の男だ。

愛しいと思う相手は・・・ユウナは何があっても守る・・・守りたいと思う。

失いたくないとも思う。ユウナのためならユウナ以外全てを犠牲にしたってかまわない。

僕にとってユウナはかけがえのない存在なんだ。それだけは覚えておいてほしい。」

ロイは自分に確かめるような口調で言った。

（・・・ロイ・・・お前・・・そんなに・・・でも、俺だってっ!!）

「分かったらしばらく席をはずしてくれ。国務のほうは頭で考えてある。

帰ったら早急にやるから今は勘弁してくれ。」

「・・・帰ったら本当に早急にやってくださいね。では私はこれで・・・」

ロイの言葉に侍従は従う。

そして、ユウナの寝る部屋には俺とロイが残った。

あんなに大声で言い合っていたのにユウナは意識を取り戻さない。

大丈夫だろうか・・・と、思いながらユウナの頬を撫でる。

熱があるせいか、頬は赤くほんのりと染まっっていて・・・触れると熱かった。

## 第五章　口ゲンカ？　2

ユウナは熱でうなされていた。

「・・・こわ”い・・・やめて”・・・いやあ・・・」

それはユウナが熱でうなされている間で一番初めに口にした言葉だった。

「ユウナっ！」

「!-!」

ロイはユウナに抱きつき、ユウナを懸命に撫で続ける。  
ゼロは呆然とそれを見ていた。

「・・・み・・・みずっ!・・・こわ”いつ・・・いやあ”・・・てきい・・・てきい・・・」

ロイの動作にまったく反応せずさつき以上にユウナは叫ぶ。

これを　寝言　といえるほど小さいものではない。

こんな叫び声はもう何かに惑わされてる・・・狂わされている・・・としか言いようがない。

そんな叫び声をユウナはするのだ。

熱のせい・・・それだけで叫んでいるともいえなかった。

ロイはそんなユウナを懸命に撫でて落ち着かせた。

「ゼロ・・・君はユウナの過去を知らないだろ？」

「ああ。」

ロイの言葉に悔しながらも俺は頷いた。

「ユウナはね、水がトラウマなんだよ。」

「!?!」

ロイは俺に視線を向けながら言う。

「ゼロ、君はユウナに海に行こうと誘ったらしいね？」

そのときユウナは 行きたくない と言も言わなかったかい？」

「!・・・言った。」

俺はこぶしを握り締めて言った。

「ゼロ、君はユウナをなぜ、海に連れ出した？」

「・・・少しでもユウナとの思い出を作りたいかったからだ。」

俺は歯を食いしばって言った。

「だったら海じゃなくてもよかったんじゃないのか？」

「・・・ユウナとまだ行ったことがないところの中に海が残ったんだ。」

俺は言った。

それは本当のことだ。

初めての場所でユウナと一緒に思い出を作りたかったのだから。

「そうか。君はそんな理由で無理強いさせたんだね？ユウナに・・・」

俺はロイの言葉にカーっとなった。

「ロイにそんな理由なんていわれる筋合いはない！！」

第一お前だってユウナを連れ去ったときユウナを辛い目にあわせただろう！？」

「それはすべてユウナのためだ。そのためには多少の犠牲はやむをえない！」

「ロイには多少でもユウナには大きかったんだ！！」

第一それはユウナのためじゃなく自分のためだったんじゃないのか！？」

俺はロイに怒鳴りつける。

ロイもカーっとなって怒鳴る。

「自分のためだとお！？僕はユウナを危険な目にはあわせない！！絶対守りぬく！！」

「ぜったいだとお！？そのために手段を選ばない奴がなにをいう！？  
そのせいでユウナが傷ついてきたというのにつー！！」

ゼロも大声で叫ぶ。

そのせいでユウナは一時的に目を覚ました。

ユウナはむくりと上半身を起こして辺りを見回す。

それに気づいたゼロは

「ユウナっ！！」

と、叫び、ユウナの体に触れる。

「まだ起きるな。熱があるだろう？」

ゼロは言うがユウナはそれでも寝ようとせず

「・・・ケンカ・・・しちゃだめだからね？」

それと・・・ロイ、勝手にいつちゃだめだからね？

私が呼んだことばれちゃうじゃない！

私が後で責められちゃうんだから！！」

「！！」

「！？」

と、二人に向かって言う。

二人はそんなユウナに驚き言葉が出ない。

二人だから、ロイに言ったこともゼロには聞こえているのだが。

ユウナはそのあと、ゼロの腕をつかみ

「・・・頭・・・痛い・・・くらくらする・・・ガンガンする・・・フラフラ・・・するうーーー」

と、言って倒れた。

「ユウナッ！！」

ゼロはユウナの背に腕を回して体を支え寝かす。

「なあ、ロイ、呼んだってどういうことだ？」

ゼロはロイに向かって静かに問う。

「ユウナのセリフにもあっただろ？僕からはいえないなあ。」

ロイは冷や汗を流しながら言う。

「だったら、ユウナの過去のこと教えてもらえないか？」

それなら話せるだろ？ユウナが水をトラウマにしたときのことを・・・」

ゼロはロイに視線を移して言う。



「それなら・・・」

ロイも仕方ないといった感じで話し始めた。

## 第五章 ロゲンカ？ 2（後書き）

次回はユウナの過去をお送りいたします。

## 第六章 ユウナの過去 1

「昔、ユウナは小さい頃、一度だけ・・広い庭にある湖に落ちたんだ。」

ロイはそう言って語りだした。

「それまでは僕と一緒に水遊びとかしていたし、ユウナは平気で水に触れていた。」

「・・・」

ロイは悔しそうにどこか悲しげに話し出す。

ゼロは息を吞んでロイの話を待った。

「ゼロ、ユウナはね、

この世に存在する生物や妖精と話すことが・・できたんだ。」

「！」

妖精と！？

そんなことがあるのか؟؟

ゼロは驚いてロイを凝視する。

「驚くのも無理はない。

だが、話すといっても言葉ではないんだ。  
感情を相手に伝える方法でなんだ。」

だから、水の精ともそれまでは仲がよかった。  
ユウナは水が大好きだったんだ。」

ゼロは驚き、それに苦笑しながらロイは話を続けた。

「僕はその頃、よくユウナのところへ遊びに行ってたんだ。  
だから、その偶然おきたあの事件の日もいたんだ。」

ロイはそのときの過去を思い出すかのように遠い目をした。

「そう・・・そのときは・・・嵐が来る直前の日だった・・・」

ロイはそついいながら思い出を語り始めた。

## 第六章 ユウナの過去 1（後書き）

今回、すごくすごく短いです。

これから家の都合でとても短くなると思います。  
了承してくださるとうれしいです。

## 第七章 ユウナの過去 2（前書き）

ロイ視点です。

## 第七章 ユウナの過去 2

その日は嵐だった。

でも僕はユウナのところにいったんだ。

だって、近いもん、滞在場所も、ユウナとの心もさへ

「ユウナ、遊びにきたよー」

屋敷に入ってユウナの部屋の扉を開ける。

「ロイツ!!」

ユウナは僕に抱きついてきた。

ユウナ!!

僕うれしいよ、でも驚いた。なんで？

「ねえねえ、外行きたいの！」

「いつていい？みんなだめっていうの!!」

ユウナは僕と比べて小さいし幼い。

だからおねだりする姿は我慢できないよー

「え、ユウナ、今嵐だよ？

それなのにいくの？」

僕はとりあえず聞いてみる。

だっていきたいには理由があるでしょ。

「うん、いくいく。」

精霊さんたちはしゃいでの。

私もまざりにいきたいっ——！！

ねっ、いいでしょ？

ロイ、いいよね？ねっ？」

僕は今、究極の選択を強いられた。

ここで断って泣かすか、

それか、

頷いて嵐の中にユウナをいかせるか。

うゝむ、実に難しい選択だ。

そしてキラキラした顔でねだられたら答えは一つになってしまう。

「・・・う、うん、いいよ、でも雨具着て、僕も一緒に行くからね？」

僕は自分もついて行くと言った、だって一人で行かせられない。

「うん、それでいいよ！

ロイ、だーいすき！！」

ユウナは再び僕に抱きついた。



ああー！なんてぼくは卑怯なのだろう、  
この快感一つのために、後々ユウナを困らせるなんて。

そんな会話の流れで嵐の中外へ行つたのだつた。

「ユウナッそこまで行くと危ないって」

僕は風に負けないよう、叫ぶ。

ユウナは湖のふちに湖を覗き込む態勢にいた。

危なすぎて僕は近寄れない。

風が音が僕を近づきさせないみたいだ。

「だいじょうぶだって……あ！！」

ユウナが叫ぶと同時に……

ビュウウウ”ボチャン！！

と、強い風邪に押されユウナは湖の落ちた。

「ユウナッ！！」

僕はこのとき気づいた。

精霊は力を暴走させているのだと。

だから止められないのだと。

僕に助けを求めていることを。

そのせいか、風は僕を湖のほうへと力強く押し始めた。

その風に乗ってズッポーン”と僕も湖に飛び込む。

ポチャン・・・ブクブクブク・・・グイッ

ユウナは波に飲み込まれ苦しんでいた。

まるで裏切られたと思っているようだ。

精霊はこんなことしたくないのに、  
嵐がそれをさせている。

僕はユウナを引っ張り、助けた。

ザブッ

なんとか湖からはいでた。

ユウナは

「げほっげほっ」

と、水を吐いて、僕に抱きついた。

身体は震えている。

寒さだけじゃなかった、恐怖からもきてただろう。

「ロイツ、ロイツ、ロイーーっ」

抱きつき、震えて恐怖するユウナを始めてみた。

「ユウナッ、もう大丈夫、だから戻ろう」

僕は震えるユウナを抱きしめて、背に担ぐと、屋敷へと戻った。

ユウナの侍女が僕になんどもありがとうございますと頭を下げた。

「僕のせいだから、謝らないで下さい。」

「でも、助けてくださいました、それにあの時も外へいかせなければ  
おそらくは不満が高まって暴走していたでしょう。

それを思えばよい判断だったのです。結果はどうであれ、仕方ない  
ことです。

それにユウナさまは無事でした、それが何よりもの感謝です。」

侍女はそう言ったのだった。

無事は無事だったけど、しばらくは水を受け付けなかった。

そのたびに僕はユウナの傍に居た。

ユウナは僕の傍にいれば水を嫌々飲んだから。

そのたびに水に恐怖し、精霊から心を閉ざし、

水の精霊にはそれ以来近づかないようにしていた。

嵐のときはいつも震えて部屋におとなしく居ると聞いていて、それからユウナの性格は変わってしまったのだった。

僕は自分のせいだと思っている。

そりゃあ、あんな可愛い表情でねだるユウナもわるいけど、それに負けてディスクという言葉で自分を満たす馬鹿な僕だもん。

それが償えるように頑張ってユウナと絆を深めて恋を育んできた。

ユウナは大きくなって、性格も少し冷酷になっちゃったけど、僕を見つめるあの瞳は成長しても変わらなかった。

それが何よりも僕にとっての報いだった。

## 第七章 ユウナの過去 2（後書き）

久しぶりでごめんなさい。

えと、明るくてユウナに一途でヘタレ？なロイでした。

ユウナなんか人格違いますね、アハハ

でも、幼いときですしロイも翻弄されたみたいで

私はよくできたと思います、ではまたの機会に

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3450n/>

---

禁断の恋 トライアングル （番外編）

2011年2月1日19時00分発行